

四季録

高校2年生の夏の初めから秋にかけて、私は学校の敷地の隅で石を彫っていました。毎日の授業が終わった後、暗くなるまでの時間でしたが、この経験が私に作品を作る面白さを教えてくれたのです。鉄の一寸鑿を石に当てて、石用の槌「セトウ」でたたいて彫ると、石が砕けかすかな煙が出て、石と鉄が焼けたような匂いがしました。そして、辺りが薄暗くなってきたら、火花さえ見えたのです。このような現象が、私が石をたたくたびに起こりました。それは、当時の私が17年間の人生で初めて味わう経験として私の心に刻まれました。

そこには私と、石と、周りの空間しかなく、たたく一瞬がそのたびに五感に印象深く刻まれ、その時間が積み重なって、永遠に続いていくかのような感覚をもたらしただけです。私はこの不思議な時間を過ごすことが好きになっていきました。同時に世界に私が一人だけであるようにも感じました。「増本ちゃん、何しよう（何しているの？）とほかの部活の友達に声をかけられるときもありました」「石ば、彫りよるとよ」と言う「ふうん、頑張ってるね」と

私の師匠の話(2)

うと彫っていた時に「左右で同じやったら動きが出らんからくさ、目の大きさやらは変化が出るようにしんしゃい」と教えてくださった。彫刻作品は通常動くことはありません。でも、動かないはずの作品を、あたかも生きて動いているように感じさせることが芸術です。その一つが、この時先生がおっしゃった「あえて左右を非対称として表現する」ことでした。これは今でも私の美術の授業の中で、恩師から教わった大切なこととして私の口から出てきます。



この高校時代の美術の先生は、私たちをおおらかな愛情で包んでくださいました。それは、特別に優しい言葉をかけてくださるといふ種類のものではなく、生徒一人一人の特性を見抜き、その生徒がより自分らしく過ごしていけるような環境を提供すること、長期にわたって見守ってくださるといふ愛情でした。高校生の時期は幼児よりも経験していることは多く、それだけ物事から新鮮さを感じるのが難しい時期ですが、私は17歳にして大きな感動体験をこの先生から与えていただいたわけです。ずっと後になって、先生は「後にも先にも、素直に右やれば彫ったのは、お前しかおらんやっぱいい」と話してくださいました。光栄なことです。

(増本 達彦・松山東雲女子大
教授・彫刻家 Dr. Irumi
asumoto)